

青雲の果て

— 武人黒田清隆の戦い —

第7回

奥田 静夫

フリーライター・開拓史研究家

第5章 新政府への出仕

外務・兵部省入りと開拓使への転任

清隆は、戊辰戦争で軍略家としての才能を発揮していくが、明治2年(1869)6月、箱館戦争から帰京した直後に、新政府に対して「国家会計出入りの数を案ずる意見書」と題する意見書を提出した。

戦争中、清隆は内乱による国家の疲弊、とくに一般民衆の飢渴きかつと困苦、言い換えれば新政府が「天下の信義」を失うことを、最も恐れていた。

「飢渴にあえぐ民衆を救うことこそ政府のなすべき第一の仕事であり、褒賞や官吏の東京移住などに経費をかけるのは、もってのほかだ。したがって大蔵省は国家会計の基本をもう一度よく勘案すべきだ」

というのが、この意見書の主旨であった。

この月、新政府は版籍奉還を実施し、翌7月には官制大改革を実施、二官六省制を施行した。

このとき清隆は新設の外務省に配属され、外務大丞だいじょうに任命された。

外務省は沢宣嘉のぶよし外務卿(公家)がトップだったが、事実上、省内で実権を握っていたのは寺島宗則外務大輔(薩摩)であった。

実は、清隆の真の望みは兵部省入りであった。したがって、この人事には大いに不満だった。

しかし新政府の実力者大久保利通が、「樺太問題を解決するためにも清隆が必要だ」と説得したので、渋々ながら外務省入りを承知した。

寺島は、このころロシアの脅威が高まる一方、朝鮮問題がむずかしい局面を呈してきたので、清隆を朝鮮に派遣し、探索に当たらせようと考えていた。大久保と寺島は、清隆の軍事的能力以上に、政治的な交渉力に期待をかけていたのだ。

しかし、9月、兵部省の実力者、大村益次郎大輔(長州)の暗殺事件が起きると、状況は一変した。

清隆は兵部省に移籍になったうえ、晴れて大丞だいじょうに昇任したのだ。

清隆は、俄然、水を得た魚のように勢いづいた。やっと自分の多年の念願がかなったのだ。

翌年2月、清隆は、「軍制に関する基本的見解」と題する意見書を明治天皇に上奏した。その中で清隆は、

「軍務ようていの要諦は『人』にあり」

として人材養成の大切さを説き、海陸軍備の基本についても、

「天下の信義を失わず、至理をもって政績あらを顕わすことであり、そのためにも天皇自ら大臣たちを率いて海外諸国へ視察調査に赴く必要がある」

と述べ、ロシアのピョートル大帝の先例を引き合いに出している。ピョートル大帝は身分を隠して西欧に滞在し、みずから先進技術を学んだことで有名な君主であった。

このころ新政府部内では、ロシアが樺太はこの函はこ泊どまりを占拠した事件をめぐり、対ロシア強硬論をぶつ者もいたが、結局は外交手腕に秀でた東久世通禧(公家)を開拓使の長官に任命することで、ロシア側との平和的な交渉の道が選択された。

そこに対ロシア和平論を持論とする清隆の存在が浮上してきた。奇襲攻撃が得意で軍略家のイメージの強い清隆は、実は意外に柔軟な思考を持ち、武力一辺倒の人ではなかったことが、新政府部内でも評価されていた。

しかし、ここで思わぬ事件が起きた。

4月、清隆は兵部省内で、大村の後任の兵部大輔前原一誠(長州)と衝突したのだ。原因は海軍の軍事費や樺太をめぐる意見の対立で、清隆の怒りは激しく、まさに前原につかみかからんばかりであった。



前原一誠
(写真提供：毎日新聞社)

上司の前原の方が縲々^{るる}弁解したうえ、辞表を出す騒ぎに発展したが、大久保利通が割って入った。

大久保は前原を慰留する一方、清隆を兵部省から退かせて、開拓使入りするよう勧めたのだ。この事件は、清隆のその後の人生を決定づける実に大きな節目となったのである。

清隆が開拓次官に任命されたのは、前述したように明治3年5月9日であった。次官就任と同時に樺太専務となり、樺太出張を命じられた。

7月、出発にあたり上奏したのが、「樺太の任に赴くに付上陳」という文書であり、やはり天皇の海外視察と人材養成の必要性を説いている。

10月、帰京した清隆は、いわゆる「10月の建議」といわれる北海道・樺太開拓に関する長文の建議を提出した。

簡単にその内容にふれると、そのポイントは次の4点である。

まず第一に、「鎮府」、つまり政治の中心地を石狩に置いて、適任の大臣を選び、総括させる。

第二に、北海道・樺太開拓の開拓費百五十万両を歳額とし、費用は薩摩藩の賞典禄十万石すべてと鉄道建設費を充て、不足分は官員の減禄分より充当する。

第三に、「風土適當の国」から「開拓に長する者」を雇い、移民計画、器械の精査、鋳山開発、海岸測量等の任務に当らせる。

第四に、海外に留学生を派遣し「事情を偵探」させる。

この考えは直ちに新政府の容れるところとなり、11月、清隆は開拓事業調査のため、欧米に派遣されることになった。

翌明治4年(1871)1月、欧米に出発。6月、欧州経由で帰国。休む間もなく開拓事業に着手する。

このあたり以降、とくに開拓行政の指導者としての貢献などは、かなりよく知られており、また本書の主テーマではないので、極力省略しながら、明治10年(1877)ころまでの清隆に関連する動きなどを、ごく簡単にふれる。

・明治4年8月、新政府は開拓使十カ年事業計画に1千万両という巨額の定額金を決定。

9月、樺太、北海道両開拓使を併合。東久世通^{みち}禧^{とみ}開拓長官の侍従長転出に伴い、開拓長官代理と

して開拓使の全権を掌握。

清隆の行った開拓事業の内容などは、井黒弥太郎氏の「黒田清隆」(人物叢書)などに詳しい。

・明治5年(1872)3月、榎本武揚らを開拓使に採用。ケプロンの指導本格化。大判官岩村通俊(土佐)に代えて、松本十郎(庄内)を重用。

・明治6年(1873)1月、清隆は「適任にあらず」として開拓次官退任を願い出るが、許されなかった。

2月、「樺太放棄に関する上書」を提出。

「樺太は毎年多くの経費を使いながらも、『自立の産』をなすことができない。樺太のごときは放棄し、これに用いる力を移して、北海道に投入することが、『今日一大急務』である」と断言する。

この論は、イギリス公使パークスの同趣旨の助言とともに、新政府の樺太政策に、大きな影響を与えた。

結局、新政府は、樺太問題でロシアに使節を派遣することを決定。

10月、征韓論をめぐる閣議など一連の動き。西郷隆盛一派と木戸孝允・大久保利通一派が対立。結局、征韓論は潰れる。

・明治7年(1874)1月、清隆が推薦した盟友榎本武揚は、海軍中将兼特命全権公使に任命され、ロシアに赴いて、直接樺太を巡る日露交渉に当ることになった。

6月、屯田兵創設。陸軍中將に昇任。

8月、参議兼開拓長官に昇任。

・明治8年(1875)5月、日本とロシアとの間で、樺太千島交換条約が批准された。

9月、江華島事件発生。

・明治9年(1876)2月、日朝修好条規調印。(釜山ほか2港の開港、領事裁判権の設定など、強制による不平等条約)



日朝修好条規の締結(東京都立中央図書館東京誌料文庫所蔵)

7月、松本十郎判官辞任、クラーク着任、天皇函館行幸。

・明治10年(1877)2月、西南戦争が起きる。

征韓論、征台論、樺太放棄論などで動く

ここで、征韓論をめぐる問題など4点について、もう少し詳しく清隆の行動を述べておきたい。

第一に、「征韓論」についてである。

西郷隆盛は、当初みずから対韓使節になりたいと希望し、明治6年8月17日、新政府に使節派遣を決めさせた。

外遊していた三条実美、大久保利通らが急きよ帰国して阻止しようとしたが、西郷は応じなかった。

このとき清隆は、

「新政府の重鎮たる者は軽々しく動くべきではない。使節は自分が代理したい」

と西郷を説得したが、結局拒絶された。清隆は突然、対樺太出兵論をおち上げ、西郷を牽制しようとしたりして四苦八苦している。

10月15日の閣議以降、西郷は三条に使節派遣の勅許を出すよう迫り、木戸孝允や大久保がこれに反対して、辞表を出す騒ぎとなった。

しかし、岩倉具視らの画策で明治天皇みずからがこの問題に断を下し、征韓論は敗れ去った。

このため、西郷をはじめ、板垣退助、後藤新平らの大物が一斉に下野するという事態が起き、ことは新政府発足以来、最大の政変に発展した。(「明治6年の政変」)

この間、清隆は大久保の意向に沿って動きながらも、一方で西郷の再起を願う複雑な胸のうちを、大久保に告白している。

第二に、「征台(台湾征討)論」についてである。

明治4年(1871)12月、多数の琉球(沖縄)漁民が台湾住民に殺される事件が発生した。

嵐で船が難破し台湾南端に漂着、台湾先住民の一部族「牡丹社」に救助を求めたが、襲撃されて54人が首をとられたというものである。

生存者12人は、清国官吏により福州(福建省)を経由して琉球に送り返された。

この事件について清国は、

「責任を負わない」

と主張したので、国内では急速に征台論が高まった。

このときは大久保利通が征台を主張して、清隆や木戸孝允がこれに反対するという複雑な図式になった。

結局、大久保が反対論を押し切り、明治7年(1874)2月に閣議決定してしまった。木戸はこれに抗議して辞表を出し、帰郷した。

大久保は、木戸らとともに、先の西郷らの征韓論には徹底的に反対したものの、やはり国内に充満する不平士族らの不穏なエネルギーを、こうした形で国外に放出せざるを得ない、と考えたのだろう。この閣議決定のわずか5日ほど前には、江藤新平、島義勇らによる佐賀の乱が起きたばかりで、その鎮圧が急がれているなかでの決断であった。

まもなく兵部大輔西郷従道^{つぐみち}が台湾出兵を決行(明治7年6月)、台湾南部の牡丹社などを掃討した。

清隆は、これによって清国に戦端が及ぶことを恐れ、樺太でのロシアの南下による背後からの危険をも警告して、

「台湾を占領することなく、舞台を外交の場に移すべきである」

との主張を繰り返した。

新政府も次第に清隆の主張の方向に傾き、結局、大久保みずからが清国に乗り込んで、交渉に当たることになった。

新政府最大の実力者大久保のこの交渉にかけた意気込みと執念はすさまじく、清国の実力者李鴻章^{りこうしょう}らを圧倒した。しかも清国に大きな利権を持つイギリスの公使ウェードが、日清間の戦争にいたるのを避けようと、調整に動いた。

こうして10月には和議を結び、清国が50万両の賠償を支払うことで決着した。このころには、台湾に派遣した日本兵3千人のうち、半数以上がマラリアに罹っていたという。

この直前の8月2日、清隆は参議兼開拓長官に任命されたが、これは清隆の姿勢が評価されたことと思われた。

第三に、「樺太放棄論」についてである。

明治6年(1873)10月、大久保利通は岩倉具視に対し、自分を樺太問題の処理のためにロシアに派遣してくれるよう、要請した。

しかし内務卿の大久保みずからが長期間、国をあけることは許されなかった。

そこで清隆は、しきりに、「自分の盟友榎本武揚を代りに使ってほしい」と働きかけた。

榎本が元賊軍の将だったという意味では、その起用は一種の奇策と映った面もあるだろうが、国際事情などに通じた榎本の登用は、人を納得させるだけのものがあった。

木戸孝允も、今回は異議をさし挟まなかった。この案は、翌7年1月に閣議決定され、榎本も久し振りの大任に奮い立った。

榎本は海軍中将兼特命全権公使に発令され、勇躍ロシアの帝都ペテルブルグに乗り込んだ。

与えられた任務は、「キュリル諸島（千島列島）を以て樺太島の代地として受取るべし」

というもので、清隆の持論「樺太放棄—千島列島との交換」の実現を担うものであった。

千島列島の全体を要求することには、厳しいものがあったが、榎本はロシア皇帝らの信用を得、硬軟とり混ぜた手段を行使して取りまとめに尽した。

その結果、明治8年（1875）5月7日、ついに千島樺太交換条約の調印に漕ぎ着けることができた。

清隆の榎本助命はいろいろな成果を生み出したが、この条約の締結は、その中でもとくに輝かしい成果として、人々に記憶された。

江華島事件で砲艦外交

第四に、「日朝修好条規（こうか江華条約）の締結」についてである。

明治8年（1875）9月、朝鮮の首都漢城（ソウル）に近い江華島付近の領海内で、測量中の日本軍艦雲揚が朝鮮側の砲台からの砲撃を受けるといふ事件が発生した。（「江華島事件」）

雲揚はこれに応戦、砲台を破壊し、兵を上陸させた。兵たちは永宗城を占領し、民家を焼き払った。

この事件の背景には、明治6年（1873）の征韓論以後も朝鮮との交渉が進展せず、この年5月以降、新政府が雲揚など二隻の軍艦を釜山に派遣して交渉を威圧し、挑発したことがあった。

この事件をきっかけとして閣議では、至急、朝鮮に対して問責の使節を派遣することが決まった。

使節には木戸孝允が予定されていたが、清隆は、かつて西郷隆盛の代理として派遣を希望したいきさつもあり、自分が使節に任ぜられるよう大久保に懇願した。

たまたま木戸が病気になり、朝鮮行きが不可能になったので、清隆の派遣が正式にきまった。

日本側は、高姿勢で交渉に臨んだ。日本側の全権大使は参議・開拓長官の清隆、副使は元老院議官の井上馨（かおる長州）である。

清隆と井上は、このとき艦船6隻、兵員数百人を率いて、朝鮮側に威圧感を与えており、いわゆる“砲艦外交”を展開したのだ。

ロシアの介入も懸念されたが、これについては、ロシア駐在の榎本武揚公使から、その心配はないとの情報を得ていた。

明治9年（1876）2月16日、清隆は、ついに日朝修好条規（江華条約）の調印に成功した。ときに清隆は42歳であった。

「明治6年の政変」以来、西郷隆盛一派を下野させるほどの危機をもたらした朝鮮の開国は、ここに決着を見た。

この条規は、清国の朝鮮に対する主権を否定し、釜山など3港の開港などを規定するもので、幕末に日本が欧米から推しつけられた不平等条約を、そのまま朝鮮に押し付けるものであった。

また、清隆らの交渉は、アメリカの東インド艦隊司令官マシュー・カルブレイス・ペリー提督の報告書、つまり彼が日本に渡航して開国を迫ったときの例を、参考にしたという。

以上のような例でもわかるように、清隆は軍事の絡む対外問題などについて、独特の存在感と行動力を発揮している。

profile

奥田 静夫 おくだしずお

1943年福井県生まれ。金沢大学法文卒。北海道開発局官房長、(社)北海道建設業協会専務理事を経て、フリーライター・開拓史研究家。一道塾会員。札幌市在住。2006年3月、「魂を燃焼し尽くした男—松本十郎の生涯」で第26回北海道ノンフィクション大賞受賞（雑誌「クオリティ」同年4～12月号連載）。
